「ぐうたら娘の役割」

たまき　（20 代）

家族と聞いてふとこんなことを考えた。

朝昼晩のご飯を作りながら外での仕事もこなす母、四六時中働いて休みが日曜日しかない父、頻繁に我が家へやってきて洗い物や洗濯物を一気にしてくれる祖母。みんなそれぞれの役割が家庭の中にあり、それなりの責任・プライドがあってこそ、生活は成り立っている。

ならば、娘である私の役割は一体何なのだろう？

私の一日のルーティンは、呑気に学校へ行って、終わったら即行帰宅してスマホをいじって寝る。学生とは言え、どれを取っても「家族のため」という要素が一つもない。我ながら非常に面白みの欠ける人生であると思う。実際、これが楽しいかと言われると正直そうでもない。

無駄だと自覚しながらも、延々と実のない時間を過ごす。それが一番の娯楽なのだと思う。

とは言え、日々忙しく働いている家族にとっては、足の踏み場に寝転ぶ娘を見て、心底鬱陶しく邪魔だと感じるだろう。けれども、彼らがその思いを表に出すことはなく、ハシビロコウのようなじっとりとした目で時折私を見るだけなのである。

さて、本題に戻るけれど、私の役割を自分なりに厳選して出してみた。

・父と母の橋渡し。

・流行を 2 人に布教する。

・沢山喋る。

うーん。あまりにもパッとしない。

ここは思い切って母に何気なく聞いてみた。すると、

「ん〜……」

数秒考え込んだ。この間の長さで、おおよその答えはわかる。

「おふざけ担当かな」

「え、何それ」

「まあ癒し担当だよね」

「……え〜、もっとちゃんとしたのないの？」

せっかく出してくれた母の答えに納得がいかず、私は強請った。なぜ普段何もしていない女がこんなにも図々しく聞けるのか全く不思議である。

「うーん、ないねえ」

そう言われて、もうこれ以上ぐうの音も出なかった。

ある日、私は修学旅行で 4 日間家をあけることがあった。こんなに家族と離れることはあまりないため、新鮮であった。だからなのか、家へ帰ると普段と違った空気が流れていた。

その日の晩、私はご飯を食べながら 4 日間の出来事を 2 時間近くかけて喋り倒した。普段なら「もうその話いいよ」と母が中断してくるのに、この日は根気よく聞いてくれた。

「たまきがいると、やっぱり明るくなるね」

ふいに、話を聞き終えた母がぼそりと言った。

「話しているだけで？」

「それがいいんだよ」

母は何ともないような顔でそう言った。横で聞いていた父もどことなく嬉しそうで、私はこそばゆい気持ちになった。

この経験があってから、私はもう一度家族について考えてみた。

きっと家族は、静かな空気の中で流れる親しみのようなものなのだと思う。

ただ何となく自分に合った役割（大小問わず）を悟り、もしくは無意識に担っていて、時に喋り、喧嘩もする集団のことを家族と呼ぶのではないか。非常に曖昧で、かといって曖昧でいい、そんな気兼ねのない存在、役割が、私の家族なのである。

私は今日も今日とて、性懲りもなく床でゴロゴロしている。